

渡辺淳一

みづうみ紀行

光
文
社

みづうみ紀行

昭和六〇年一〇月三二日 初版第一刷発行
昭和六〇年一一月一〇日 第二刷発行

定価 二二〇〇円

著 者——渡辺淳一

発行者——大坪昌夫

発行所——株式会社 光文社

東京都文京区音羽二一二—二三ノ郵便番号112
電話 東京〇三九四二二三—四二一代
振替 東京八一五三四七

印刷所

製本所——図書印刷

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。

© Zyuniti Watanabe 1985

ISBN4-334-97038-9 Printed in Japan

「J」'83・10月号〜'85・4月号連載

渡辺淳一



みずうみ紀行

光文社

みずうみ紀行 目次

支笏湖

5

風蓮湖

10

湖北（琵琶湖）

15

池田湖

20

尾岱沼

25

白駒池

30

田沢湖

35

倶多楽湖

40

穴道湖

45



塘路湖

50

宝ヶ池

55

能取湖
サロマ湖

60

屈斜路湖

65

御釜
(蔵王)

70

洞爺湖

75

摩周湖

80

西湖

85

大沼
(函館)

90

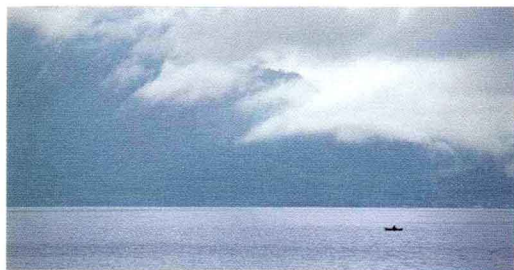
阿寒湖

95

写真／宮地義之
デザイン／熊谷博人

支笏湖

支笏湖の語源である「シコット」はアイヌ語で「大きな穴」の意



もつとも北国らしい湖は、ときかれたら、わたしは即座に「支笏湖」と答える。

ことに支笏湖ほど、北国の静謐と憂愁をあらわしている湖はない。

一般には、「支笏・洞爺」と並び称せられるが、この両者はすべてにおいて対照的である。

支笏湖が暗く沈鬱であるのに対して、洞爺湖は明るく陽気である。前者がムンクの絵を思い出させるのに対して、後者はマチスの絵がふさわしい。

どちらを好むかときかれたら、むろん支笏湖のほうをとる。だが、それでは支笏湖のそばに棲むか、ときかれたら考えてしまう。

たまさかに見るにはいいが、支笏湖は心をひきたて、開かせてくれる湖ではない。

支笏湖の語源である「シコット」は、アイヌ語で、「大きな穴」という意味である。

たしかに支笏湖を俯瞰すると、この感じがよくわかる。札幌から湖畔へ向かう峠や、樽前山から見下ろすとき、支笏湖は山々のあいだで円く落ちこんだ窪み、そのものである。

この湖は湖畔の南にある樽前の火山爆発によってできた湖で、いわゆるカルデラ湖である。

カルデラは地質学的に、火山体の崩壊や陥没によってできた凹地をいうが、この言葉はポルトガル語の「釜」とか「鍋の底」という意味からきている——らしい。

かつてポルトガル人も、自然の神秘なたたずまいに、アイヌと同じような感じを抱いたのであろう。カルデラ湖の特徴は、火山の爆発とともに一気に地盤が落ちこんだため、湖の周辺が峻しいことである。山裾からすぐ湖面に達し、途中に平坦な土地はほとんどない。

支笏湖はその典型で、湖のまわりの平地といえば、湖畔のわずかな部分と、その南のモーラップくらいなものである。

周囲四十キロをこす湖であるのに、他はほとんど絶壁で人を寄せつけない。

もつともそのおかげで、支笏湖は透明度二十七度という澄んだ色を保ち、そのまま飲料水として使うこともできる。



北国の静謐と憂愁をあらわす代
表的な湖。

『貴 眠れぬまま明け方、素足
を水につけたことを思い出す。』

湖心は深く、最深部は三百六十メートルにも達するという。

かつて爆発とともに、この巨大な空間が瞬時のうちに湖底に沈みこんだ。

そのため、湖の底には無数の樹木がいまなお、枝を伸ばして立ち尽くしているという。

学生のころ、「支笏湖で死ぬと、死体があがらない」と教えられたことがある。いったん沈んだ死体が、複雑にからんだ枝にとらえられて、浮き上ってこられないのだという。

それ以来、わたしはこの湖に憧れながら、恐れるようになった。

夏の陽光のなかで、湖面は濃い緑を映して静まり返っている。

だがその穏やかな湖の下には、いくつかの死体が樹木にとらえられたまま沈んでいる。あるものは横たわり、あるものは頭を直立した姿で浮いているのかもしれない。

平穏な湖面は常に波乱の予兆を含んでいる。

いったん雲が動き、風が吹けば、湖はたちまちうねり、一メートルをこす波が打ち寄せる。湖につき出た風不死岳が泣くかと思うほど、風が湖面を横切る。

穏やかなときからは到底、想像もつかぬ荒れようである。

これもすべて、湖底に沈んだままの死霊のなせるわざであろうか。

もうはるかな過去になったが、大学の二年生のとき、わたしはモーラップキャンプ場でテントを張っていた。

当時は森閑として、真夏だというのに数個のテントと、営林署の小屋が一つあるだけだった。

明け方、目覚めると霧が深く、その彼方から起きはじめた鳥の音がきこえた。湖は霧のなかで静まり返り、汀にわずかに小波が寄せていた。

眠られぬまま、わたしは流木を拾いながら汀を歩いた。途中、素足を水につけ、その冷たさに驚き、テントに戻ろうとしたとき、湖面の先に黒いものが見えた。





▶死ぬならここで……。

流木を持ったまま立ち止まり、目をこらすと、一隻のボートが朝靄のなかを、漂いながら近づいてくる。

「おうい」と、声をかけかけて、わたしはやめた。

ボートは湖畔によくある二、三人のりの小さなものだった。

だが汀に寄せられたボートのなかには人はいなかった。

かわりに、黒皮の男の靴と、白い女のサンダルだけが、底の板の上にきちんと並べられていた。

わたしはあたりを見廻し、急に不安にとらわれた。

これは一体どうしたことなのか。明け方、何故、無人のボートが漂ってきたのか。そしてそのなかに、男と女の靴だけが残っているのか。

もしかして、二人は深夜、旅館を抜け出し、湖に漕ぎ出て心中したのではないか。

わたしは慌てて友達を起こし、湖畔の旅館に連絡した。

連絡を受けた旅館ではいろいろなところへ問い合わせ、数時間後に、ある旅館から若い一組の男女がいなくなっていることが確認された。

ボートに残されていた二足の靴は、まさしく、その二人のはいていたものだった。

不吉な予感的中し、二人はやはり死を覚悟で、深夜、湖心に向かったのだった。

だが何故、靴だけきちんと残していたのか。

ボートが打ち寄せた湖面を見ながら、わたしは、二人はやはり一度沈んだら、戻ってこれないことを知っていたのかもしれない、と考えた。

もはや湖面に戻れないから、形見に靴だけ残していった。

事実、その後、二人の死体があがったという話はきかなかった。

このときから、わたしはいつも支笏湖で命を絶つことを考え続けてきた。

●羽田へ飛行機1時間25分千歳
空港バス50分札幌バス1時間
30分支笏湖畔千歳空港より支笏
湖行きバスあり、所要時間50分

あの湖は怖い。あんな冷たい湖心で、永久に眠り続けるのは酷である。
だがどうせ死ぬなら、あの清冽な湖で、なんのあとかたもなく消えるのも、好ましいかもしれない。
のちにわたしは「無影燈」という小説を書いたが、その主人公は、最後に愛する人をおいて一人、
この支笏湖で命を絶っている。



学生のころ、「支笏湖で死ぬと、死体があがらない」と教えられたことがある。



大学二年生のとき、若い一組の男女がいなくなり死体があがらなかった。

風蓮湖

風蓮湖は道東の片隅に、なげだされた湖である。

三年前の秋、道東の別海町に行ったとき、役場の人からこんな話を聞いた。

昨日、道東十五号線のわきにおいてあった蜜箱が熊に持去られた。初めは誰かの悪戯かと思ったが、箱が鋭い爪で引つ搔かれ、壊されているところから熊の仕業とわかった。

驚いた養蜂業者が役場に訴え、直ちにハンターが出勤したが、いまだに熊は捕まっていない。

この話をきいたとき、わたしは同じ道を釧路の方に向かって走っていたが不思議に怖くはなかった。それより、こんな根釧原野の果てに、養蜂業者が来ていることのほうが不思議だった。

わたしがそのことをきくと、「まわりに原生花園があるほどだから、花なんていくらでもありますよ」という返事だった。

たしかに見はるかす彼方まで続く草原には、無数の花が咲いている。が、それが野生のまま、乱雑に咲いているので目立たないのである。







海とつながっていた水路が閉鎖されてきた海跡湖。

それにしても、この話はどこかユーモラスである。養蜂業者の訴えて、ハンターが出動したというのに、なにか遠い国の話をきいているように、のどかな感じである。

とくに熊があの大きな手で蜜を掻き出そうとしている姿は想像するだけで滑稽である。

「熊は蜂蜜が好きなんですか」

「そりや、蜂蜜とみたら目がありませんよ」

「でも、蜜箱を壊したら、蜂に刺されるでしょう」

「刺されても、外にでているのは、鼻の頭くらいですからね」

そういえば、熊の全身は剛毛におおわれていて、蜂も、攻撃のしようがないらしい。

今度は、風蓮湖^{ふうれんこ}に向かいながら、わたしはこの三年前にきいた話を思い出した。

果てしない平原に一本、真直ぐの道が走っている。先にもあとにも、車の影が一台も見えぬこともある。車の左右は茫々とした草原が続き、ところどころ思い出したように林が現れる。陽は明るい。風は冷たく、その風に名も知れぬ野生の花が揺れている。

そんな情景を見ると、道のかたわらから熊がでてきても、おかしくないような気がしてくる。暢^{ちやう}んぴりと熊は蜜箱をいじくり廻し、やがてあの大きな手でべろべろと舐めはじめる。怒った蜂が群がっても、熊はときどき首を振るだけで、やがて食べ終ると、ぼいと箱を捨てて去っていく。

風蓮湖へ向かう道は、そんな静かでユーモラスな自然のドラマが、いかにもおこりそうである。だがわたしが風蓮湖を訪れたのは、今度^{こんど}がはじめてであった。

いままで道東には何度も足を運んでいるのに、何故か風蓮湖だけは行っていないかった。

その理由の第一は、交通の便の悪さである。

観光ガイドには、奥行^{おくぎやう}白^{しろ}駅^{えき}から四キロ、厚床、根室から車で小一時間、などと記されている。

だが実際にそのとおり行くのはきわめて難しい。まず奥行白^{しろ}駅^{えき}というのが標津^{しべつ}線というローカル線

3月下旬には北に帰っていく。



で、一日に数本のジーゼル車しか走っていない。厚床も列車の数は少ないし、根室まで行ってしまうと、つい納沙布岬のほうへ足が向いてしまう。

それにこれらの場所から車で一時間走っても、たどり着くところは湖の南端の白鳥台までで、風蓮湖の一部が見られるだけである。

一口に風蓮湖といっても、周囲五十八キロ、湖面面積五十二平方キロにもおよぶ大きな湖である。ここには風蓮川、厚床川、矢白別川などが入りこむが、水深は最も深いところでも十一メートルにしか達しない。

いわば浅く広い海跡湖で、かつて海と水路でつながっていたものが、水路が閉鎖されてできた湖である。

もつともいまも一箇所、わずかに海とつながっている箇所がある。湖の北側から出ている砂嘴の突端で、その一帯を「走古丹」という。

わたしはこの地名が気に入っている。

「古丹」とはカムイコタンなどというように、北海道の地名によくある名で、古いアイヌの村落を意味する。



白鳥の飛来は11月半ばから12月まで。



「走古丹」というのは、もちろん後に和人がつけたものだが、この地名をきくと、なぜともなく湖畔をひたすら馳^かけていく青年の姿^さが思い浮^うかぶ。

いまは「走古丹」まで、オホーツクと風蓮湖に囲まれた砂地を、車で行くことができるか、車窓の両脇は子供の背丈ほどある雑草が生い茂り、無数の野の花が咲いている。

走古丹に向かいながら、わたしは夕陽を追って西へ駆け続けていく少年のことを思った。

走古丹という名は、そんな少年と自然がとけ合う情景を思い出させる。

だがこの静かな村落が、いつとき白い来訪者で賑わうときがある。十一月半ばから十二月までの、白鳥が飛来するときである。

この期間、静かな湖面は優雅なオオハクチョウにしめられ、目に沁みるほど蒼い湖水と白鳥の白が鮮やかなコントラストを描く。

それにしても、この湖は呆きれるほど素つ気ない。

周囲五十八キロに及ぶ湖畔のどこにも、観光客や旅人を待って、つくられた施設はない。

ただ一つ、湖岸の南に白鳥を見る展望台があるだけだが、それとて厳しい冬に訪れる人は数えるほどしかない。

風蓮湖は道東の片隅に無雑作むざうさになげだされた湖である。道はもちろん、町の誰一人とて、この湖を觀光し、交通の便をよくするといった気配もない。

だがそれ故に、風蓮湖は美しく、はるかなる原始の思いを呼び醒さます。

その草原の彼方では熊が暢んぴり蜜を舐めている。

風蓮湖はそんなイメージを喚起する、広く茫々として果てしない湖である。

●根室駅(バス20分)風蓮湖・東極
下車(湖を眺める景勝地白鳥セン
ターも近くにある)
厚床(津線15分)奥行白(徒歩
40分)風蓮湖・走丹(ここからの
眺めも最高)

湖北

(琵琶湖)

日本最大の湖



大学二年生のとき、わたしは一人、札幌から京都へ向かった。すでに札幌ですすむべき学部も決まっていたのに、京都への憧れを捨てきれず出かけたのである。

当時はまだ飛行機はなかった。札幌から船と汽車を乗り継いで京都まで、最も接続のいい急行で、一日半もかかる。

とくに、青森から京都まで、奥羽、羽越、北陸本線と乗り継いで行く旅は長く、これだけで丸一日かかった。

三月の初めて、青森駅のホームは冷え冷えとし、港のまわりの山々にはまだ残雪があった。そこを早朝六時に発ち、大館から日本海側に出るころ、ようやく陽は高くなる。秋田から酒田に近づくころ昼になり、新発田から長岡に向かうにつれて日は暮れはじめ、夕暮れのなかで佐渡の島がかすかに見えた。柏崎から直江津を越えるころは、日は完全に暮れ、富山から金沢を通過するころは真夜中であつた。

深夜、朦朧とした頭のなかで、「フクイ、フクイ……」と呼ぶ駅員の声をきいた。

やがて敦賀をすぎ、日本海と別れて米原に近づいたころ、夜はようやく白みはじめる。

長旅に疲れた目で呆んやり窓外を眺めていると、朝霧のなかから不意に琵琶湖の水面が現れる。

それはなんの前ぶれもなく突然、数歩駆け出せば届く近さに現れ、昨日一日、飽きるほど見た日本の荒々しさとは打って違って、優しく穏やかである。

朝霧のなかでこの眠るがごとき湖面を見たとき、はるけくも来た、という思いとともに京都はもうすぐだと心が浮き立つ。

この実感は、北国から京を目指した戦国の武将達が、みな同様に感じたことに違いない。

かつて前田勢も浅倉勢も、北国街道を下り、余呉から木之本へ出て琵琶湖を見たとき、その美しさに息をひそめながら、天下制覇の野望が一步近づいたことを実感したに違いない。織田や武田や斎藤などの諸勢も、伊吹山を越えて琵琶湖を見たとき、京都は目前と気持が高ぶったであろう。